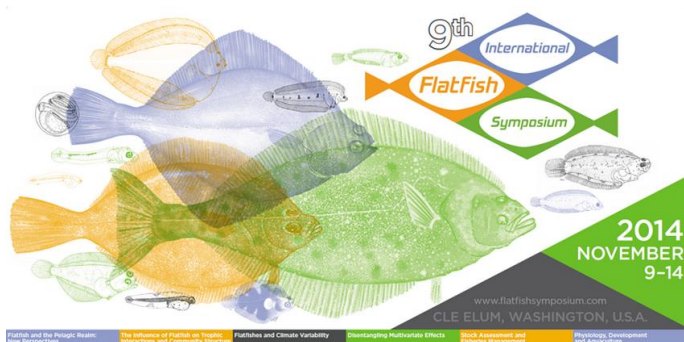


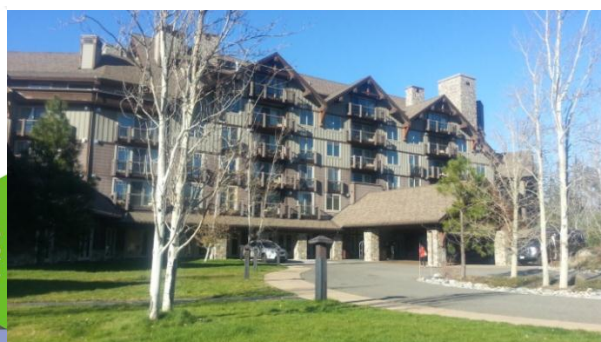
9th International Flatfish Symposium 2014 に参加して

2014年11月にアメリカ・シアトル近郊のクレエラムで開催された第9回 International Flatfish Symposium (略称 IFS) に参加し、研究発表を行うと共に、海外の研究の現状に直に触れてきましたのでお知らせします。

IFS は3年に1度開催される異体類(カレイ・ヒラメ)のみをターゲットとした国際学会で、毎回、世界各地から研究者が集まり、今回もアメリカ・ヨーロッパ諸国・豪州・インド・日本など19カ国から90数名の研究者が参加していました。



第9回 IFS のポスター



学会会場のサンカディア・リゾート

今回は、NOAA と国際ハリバット委員会が主催ということで、パシフィックハリバット(オヒョウ)に関する発表が多く、その他、太平洋ではアラスカやベーリング海に多く分布するノーザン・ロック・ソールという種、大西洋ではやはりプレイスやコモン・ソールといった水産資源として重要な種の発表が多い印象を受けました。今回の IFS には「中層における異体類」、「資源評価と資源管理」、「異体類と気候の変化」など6つの分科会(セッション)が設定されていました。「中層における異体類」というセッションは、オヒョウのような大型のカレイ類でも海底を離れ、浮魚のように中層を群泳することがあり、そのためサケ・マス用の浮き漁具などによる混獲が問題となっていることから設定されたようです。実際に大型のオヒョウが海中を群泳している様子を海中カメラで撮影した発表や、データロガーを体に装着して行動を把握する研究が発表されていました。データロガーなどを用いた行動把握の研究発表は他のセッションでも多く、異体類でもこういった研究手法が非常に注目されていることを実感しました。道総研水産研究本部でも、異体類の一種であるマツカワにデータロガーを装着して行動を追う研究が進められています。

「資源評価」セッションでは、研究者が行う資源評価の結果と漁業者感覚との間のズレに関して、ベルギーの研究者が発表していました。現在の資源状態が低水準で将来的にも資源は減少するという研究者の資源評価結果に対し、漁業者は漁獲物の中には小型のものが増えていることから、資源

評価結果よりも資源の先行きは明るいのではないかという疑問をもっており、この疑問に応えるため調査手法や解析法を改良した結果が述べられていました。こういった問題は国や魚種を問わず起こり得るものなので、非常に興味深いものでした。同様の取り組みは道総研水産研究本部でも行われています。例えば釧路東部海域のケガニについて、水産試験場が出したデータに基づいて設定された漁獲許容量と実際の漁模様との間に一時期乖離がみられましたが、解析に水温データなどを取り入れることでこの乖離を埋めようという取り組みが進められています。

私は「異体類と気候の変化」のセッションで、2007～2013年に稚内水試の担当者や北海道大学と協力して道北日本海～オホーツク海に分布するマガレイ稚魚の生態の研究に取り組み、水温や餌環境の違いが、稚魚の成育場間（日本海 vs. オホーツク海）の成長差に影響していることを発表しました。当初、発表はポスター形式で申し込んでいたのですが、事務局から口頭発表に変更しないかと打診されました。私は国際学会で口頭発表をした経験がありませんでしたが、せっかくの機会なので口頭発表に挑戦することにしました。手前味噌ですが、私の発表はなかなか好評で、発表後には多くの参加者から質問やコメントをいただき、道総研で行ってきた研究の発信という学会参加の目的は達成できたと思えました。



口頭発表中の筆者



日本人参加者全員で記念撮影

国際学会への参加には、第1に最新の研究に触れることができ、また、自身の研究を国際的に発信することができるというメリットがあります。それ以外にも、会場に数日間缶詰状態にされて様々な国から集まった同じ分野の研究者と朝から晩まで専門分野の話をするといった非常に刺激的な体験ができ、研究者のモチベーションを高めることができる機会であると感じました。私は今回道総研の海外研修制度を利用して参加しましたが、この制度は所属する研究員にこうした体験を提供できる非常に良い制度であると感じました。今後は、今回得た貴重な体験を踏まえて日々の業務に取り組んで行こうと思います。